187 音楽家や作家のジャポニスム（2023 年８月 22 日）

これまでに印象派の画家や工芸品におけるジャポニスムを紹介してきましたが、ジャポニスムの影響を受けたのは美術工芸分野の芸術家に限りません。今回は、音楽家や作家のジャポニスムを取り上げます。

まずは、詩人のステファン・マラルメ（1842-1898）です。パリで生まれたマラルメは、作家のヴィクトル・ユーゴーやテオフィル・ゴーティエの影響を受け、15 歳頃から詩を書き始めました。アメリカ人作家のエドガー・アラン・ポーの作品を読むために英語を学び、若い頃は英語教師として働いていました。マラルメは、同時代の数多くの芸術家と交友関係を持ち、画家のエドゥアール・マネ、エドガー・ドガ、クロード・モネ、オーギュスト・ルノワール、詩人のポール・ヴァレリーや作曲家のモーリス・ラヴェルなどと交流がありました。

パリから南東約 70 キロのところにあるヴュレンヌ=シュル=セーヌには、マラルメが暮らした家が、美術館として一般公開されています。この家には、マラルメが当時流行していたジャポニスムを取り入れていたことを示すものが残されています。まず、北斎漫画や浮世絵からインスピレーションを得たモチーフが描かれているセルビス・ルソーの皿が壁に飾られています。そして、別の部屋には、漆器の棚（写真右）があるのが目に入ります。美術館の解説によると、マラルメが暮らしたパリのサン=ラザール駅近くのローマ通りのアパートにあったものです。

ジャポニスムブームの頃に日本から大量に輸入された団扇も展示されています（写真左）。マネ作「団扇と婦人（ニナ・ド・カリアスの肖像）」にも描かれた団扇は、小ぶりな団扇で、日本髪を結った女性が描かれています。

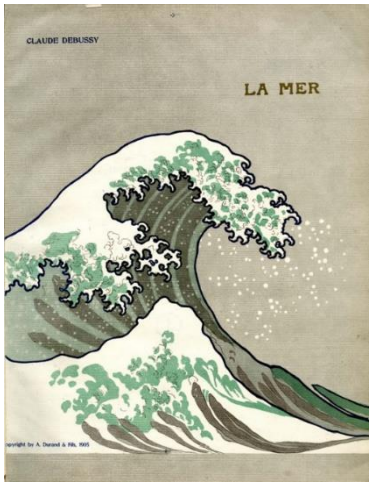
マラルメの交友関係の広さを示すものとして、ドガがマラルメとルノワールを撮影した写真が展示され、マラルメの家をしばしば訪れていたラヴェルが弾いたと考えられるピアノも展示されています。

パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

モーリス・ラヴェル（1875-1937）自身も、当時の流行を取り入れていました。パリから約 45 キロに西に位置するモンフォール・ラモリには、1921 年から亡くなるまでの 16 年間を過ごした家が一般公開されています。日本や中国の小物が飾られたアジア風の部屋のほか、いくつもの部屋に浮世絵が飾られています。歌舞伎役者を描いた役者絵や風景など日本を描いた浮世絵がある一方、欧米人を描いたものもあります。日本は 200 年以上続いた鎖国の後、19 世紀半ばの江戸時代末期に開国して欧米諸国との交易が本格化し、横浜や神戸など５つの町には外国人居留地が作られました。この頃、欧米人を描いた浮世絵が作られるようになりました。美術館に展示されているものではありませんが、フランス人を描いた浮世絵も残されています（写真左）。

Les Français/「仏蘭西人」1861
OCHIAI Yoshiiku/落合芳幾
Minneapolis Institute of Arts
ミネアポリス美術館

最後に、作曲家のクロード・ドビッシー（1862-1918）が作曲した交響曲「海」の 1905 年に出版された初版のスコアの表紙は、葛飾北斎の富嶽三十六景の「神奈川沖浪裏」のイメージが使われています。



以上の例から、ジャポニスムの影響を直接的に受けた作品を発表した芸術家以外でなくとも、芸術家は常に最先端の流行に敏感で、それぞれの形でブームを取り入れていたことが分かります。